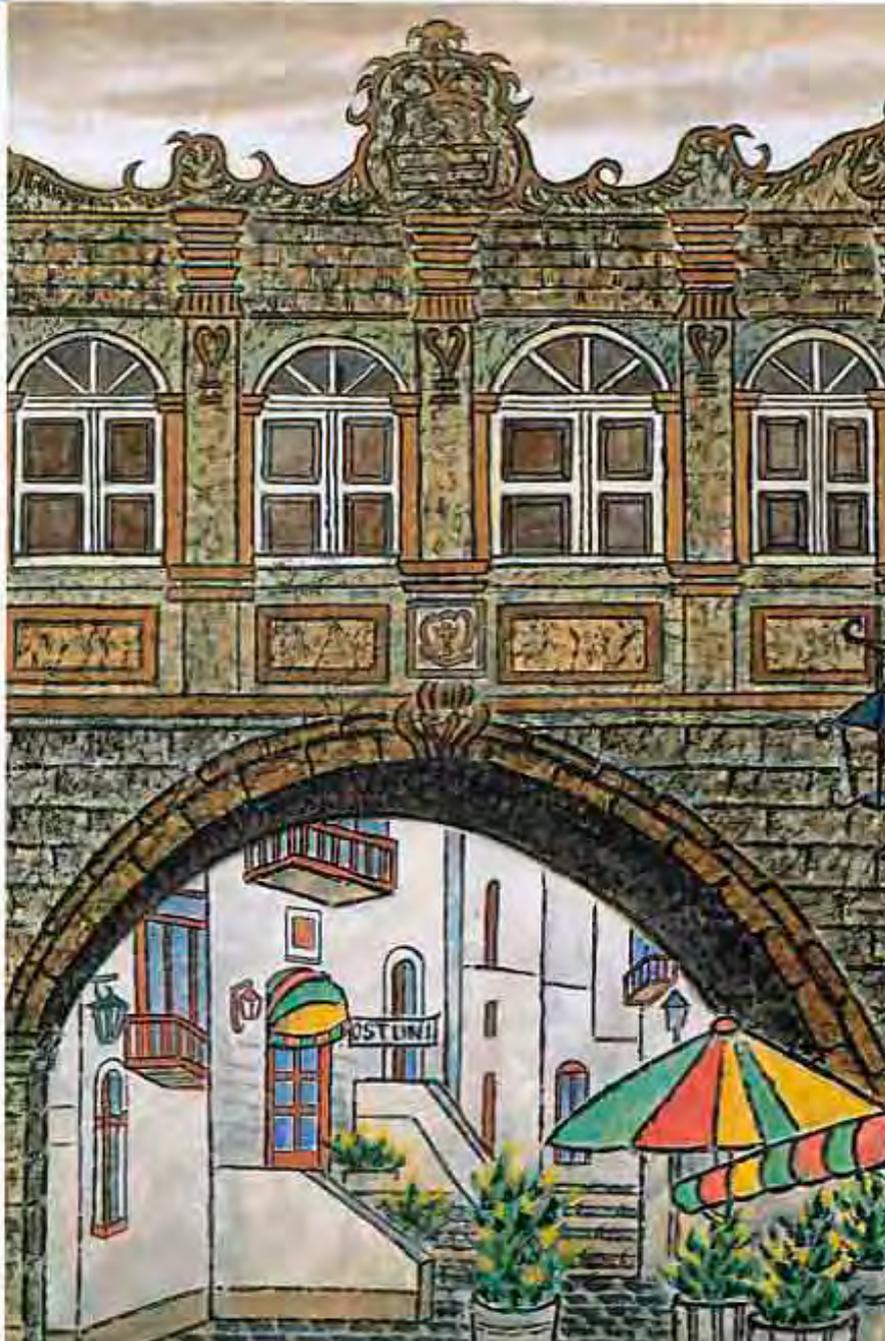


沖

6
2017

発行所：[不明]



忘

霜

能村 研三

母命終

忠敬の気骨貫きうらけし

春の航孔雀開きの水脈を曳く

郁子垣の昂り時の蔓の先

鉦の刃叩きて入るる忘霜

四月二十八日、妻の母が亡くなった。二月に埼玉の川口から船橋の老人ホームへ転居した矢先、癌が進行し市川の病院へ入院を余儀なくされた。妻と娘の麻衣は二か月の間、一日も欠かさず病院での看病を続けた。私も時間を見つけては見舞に行った。病床では得意の詩吟を詠ってくれたりもした。

何とか桜が咲く頃までは生きていてほしいということが家族の皆の願いであった。四月の初め頃から食事もとれなくなり、点滴が頼りの治療となったが、体を起こして外の桜の景色を見せることはついにはできなかった。

母とのかかわりは私の結婚以来ということになるので、ちょうど四十年になる。私の実母は私が三十三歳の時に亡くなっているの、それを遥かに越えた。

花曇 朱肉のゆるび宥めをり

蛍光灯 渋り点きして穀雨なる

鯉 幟 早瀬の灘を 目指したり

年波の 負けず 嫌ひも 端午の日

朴若葉 透きて 妙案 浮かびけり

看取り 尽く 須臾 卯の花曇りかな

母村田美津江逝く

母は明るい性格で、晩年は外房の潮の香りがするところに居を移し、多くの趣味を楽しんだ。義父が亡くなつてからしばらく私の家で一緒に暮らした。

俳句も私に迷惑にならないようにとの気遣いから、密かにやっていたが、市の広報紙の俳句欄に投稿し市長賞を受賞したこともあった。

私の勤めもあつて「沖」に投句した時期もあつたが、何事にも一生懸命であつた。老人ホームでは、書道、絵手紙、カラオケなどにも積極的に参加した。

葬儀は私が喪主をつとめることになつたが、会場には書道や絵手紙の作品の他、自らが詠んだ俳句を認めた色紙、短冊も飾つた。

秋の風呼ぶかに高き野の一樹

日と風の結び目ほぐれ曼珠沙華
後れ毛のしろがね色に初しぐれ

美津江

能村 研三

蒼茫集



花 筏

上谷 昌憲

さわさわと安房の波音金盞花
閉ぢたがる新書押さへる暮春かな

花筏くづれもやがて花いかだ
フリスビー佐保姫は裾ひるがへし
不機嫌な佐保姫なりしフリスビー
手作りの巣箱匿ひ花は葉に
やる気なささうな鎮座の柳の芽
*花散らしとも浩一の微醺とも

熱からむ

楠原 幹子

彩あるもの

宮内とし子

*満開のさくら樹液の熱からむ
しやばん玉オパール色に輝けり
人間を無視してゐたる雉子かな
春愁の金属疲労にも似たり
鏡中の肩越しにある春の闇
をだまきや自分史にまだ余白あり

よく来る町

辻美奈子

*虚子の忌の森に彩あるもの探す
花の下石のベンチに石の冷
花冷の谷中坂下コロツケ屋
呼び水に応ふるポンプ蝶の昼

初桜よく来る町の知らぬ場所
催花雨の空気に色のついてゐる

たいていは一人でいつも花曇
咲き満ちてさくら潮の香のしたり
花の空荒れて流れを急ぐ川
応援歌とどく落花の老木樹

裏階段

千田百里

*雲美しき水の地球の水の春
花ちらしの雨やわたしは散りませぬ
春愁も裏階段も螺旋状
効くかしら能書を読む万愚節
投了の棋譜は狙春の迷路かな
逃水や地獄極楽誰も知らず

種牛

森岡正作

万葉の世へ真間川の花筏
一山を遠目ぼかしに桜かな
*種牛の孤独に飼はる蝶の屋
路売れり一尺五寸の茎揃へ

順路逸れぼうたんの緋に溺れゐる
日輪に沿ひて傾く蝸蚪の国

ビリヤード

広渡敬雄

紐ひとつ色の違へる雛納め
みちのくの山裾濃なり辛夷咲く
間伐の朱き標や彼岸入り
*ビリヤードのつやつやの玉三鬼の忌
屋号呼びあうて繰り出す若布舟
うららかやときどき波のかかる岩

入学

田所節子

*陽炎に包まれビルの力抜く
娘の住みて部屋にあふるる春の色
乗換のややこし都会入学す
入学祝ふひとり住ひの者同士
崩れぬといふ自負のあり落椿
白子干す釜揚げの湯気日に染まり

ドーナツ盤

内山照久

春愁の苦さまぎらすエスプレッソ
囀や花びらのごと手話の指
車座の会話弾める桜餅
緑立つ共学となる男子校

*ドーナツ盤てふ昭和の遺産鳥雲に
焦げ臭き昭和の記憶麦の秋

白濁

大川ゆかり

*日向ぼこ身ぬち白濁してゆきぬ
蝶の昼甘味処のをとこ連れ
落ちてより色競ひだす椿かな
春宵や白鼠色の江戸小紋
春ともし小籠包のぷつくりと
桜満開ミサイルは海中(わたなか)へ

十五の動悸

甲州千草

*桐の花母の手提げの木の把手
花李十五の動悸いまも持つ

蝌蚪に脚時には愚図で良い事も
風船の括つてありぬ古着市
駱駝待ちつづける砂丘夕おぼる
抱かるるか喰はるるか夜の芽吹森

藪知らず

吉田政江

汲み置きの水に塵浮く養花天
平成の春を透かして藪知らず
*千本公孫樹個々密々と芽立時
花万朶式年の杜全うす
芽吹く枝の手を繋ぎゐて葡萄棚
葉桜や生徒の顔と名が一致

木の駅舎

荒井千佐代

潮差して運河うねりぬ涅槃雪
海光に目つむる猫や花大根
*さへづりや昼を点せる木の駅舎
シスターが神父を恋へりさくらばな
子の眠る部屋の天上ゴム風船
ビル置きしごとくに巨船花の昼

交はり

松井志津子

灯台に外階段や鳥の恋
手囲ひのマツチの匂ふ彼岸墓
*交はりは淡きが佳けれ独活晒す
鳥語どこより雨の万朶の桜かな
惜春のフランスパンはかき抱く
藁屋根の雨滴明るし弥生尽

半仙戯

大畑善昭

堅香子の群落いまも男の子と木
庭の木を伐り囀の数減らす
対岸の鶯に耳澄ませ佇つ
永き日の書斎を留守にしてをりぬ
*半仙戯山の天辺いくつ越え
畝立ての十畝真つ直ぐ揚雲雀

朴一花

酒本八重

歳時記を重しと陽炎ささやけり
思うても適はぬ自立馬酔木咲く

園から五分口笛の早春譜

糸遊や埴輪の口の呆として
音なべて消し苗室の苗一途
*雲あるを意中に朴の白花かな

火の山

藤森すみれ

この森はこころの水場座禅草
湖風を自在に返しつばくらめ
土の色信じ明日へ菊根分
信濃なる火の山黙し芽吹き急
春耕の鋤に瀬音の急調子
*百合の樹の直情春の緑山館

樹番号

千田敬

翁草自愛他愛のひげ伸ばし
春の沖ハワイへ奔る波たかし
砂文字を波が拾ふよ磯の春
樹番号幹に巻きつけ春落葉
*ものの芽や昭和の森に昭和なく
遠なるは能登の荒潮海苔を噛む

潮鳴集



黎 明

栗原公子

ル ー ペ

安藤しおん

*もう上は目指さず三日目の風船
遠目ほど揃うてをらず芝桜
黎明は白木蓮の梢より
点描のごと曇天の姫こぶし
下駄音は荷風か八幡町おぼろ

花 三 分

辻前富美枝

*花三分花には華の設計図
桜蕊降るや海抜ゼロメートル
花吹雪ひたすら走る甲賀衆
水木邸すでに書割梨咲けり
花月夜そろそろ鬼の踊り出す

添削の一字か幹に噴くさくら
雲雀東風遠に電光文字昇る
*脚本を紡ぎしルーペ梨花ま白
ふらここに私の翼預けあり
紫陽花を淡くし濃くし相隣る

百の背中

望月木綿子

つくづくし然りとて風の申し子に
風音は春三日月の吐息とも
ドガの絵や移り変りの春帽子
*逃げ水や百の背中を追つてをり
春愁やほつとする嘘罪な嘘

ひらがな

町山公孝

ひらがなのにあふなのはな惜春忌
荷風ロード濡れてなのはな蝶と化す
円周率ここで切り上げ糸桜
*ひらがなのながるるやうに糸ざくら
梨の花ふはふはふはとバラードに

かつ井

峰崎成規

春風を掴まへに行くすべり台
かつ井にカロリー表示荷風の忌
公孫樹てふ神の触手へ木の芽風
眼裏に記憶の連写花吹雪
*逃水をプラス思考でさらに追ふ

乱反射

藤代康明

志功の鑿円空は鉈のどけしや
鳥帰るトランペットのミュート音
立春大吉大提灯に迎へられ
空狭しビル春光の乱反射
*地下鉄は江戸の掘割うららけし

手擦れの鍬

塩野谷慎吾

春塵やピアノの上の子の写真
*花人となりて母校を訪ねけり
相伝の手擦れの鍬や畑を打つ
引き波を追ひつつ拾ふ桜貝
知つてゐて知らぬふりなり四月馬鹿

春の川

篠藤千佳子

白梅や風弱くなる強くなる
旅人になりたくて吹くしやぼん玉
行く先はゆくゆく決める春の川
*ふらここや順番待ちといふ作法
鰻頭に焼印じゅつと暮の春

渚

七田文子

春眠に渚のありて寄せ返す
歩くためだけに歩いてうららけし
鯉に手をたたき春愁遠ざくる
花は葉に寿退社てふ言葉
*葉桜やシャツのまばゆき丸の内

飛鷹選評



能村 研三

木製のパン屋の引戸ミモザ咲く 木村 美翠

最近は何人で経営する手作りパン屋が流行っている。もちろん個性のある美味しいパンを作っている。この句で詠まれたパン屋さん、街中から少し離れた郊外にあるのだろうか。近くにはミモザの木があり、春になると黄色い花をつけて、アンティークな木製の引き戸があるパン屋さんによく映えている。硝子の入った木格子の引き戸をガラガラと開けると、ふんわりと甘いパンの香りに包まれた。

噴水の 一柱 光り 卒業す 岡本 秀子

思い出のいっばい詰まった学校を卒業する日は万感の思いがこみ上げてくる。普段見慣れた校庭の正面にある噴水もいつもとは違って凛とした勢いで水を噴き上げている。中七の「二柱光り」とは作者の造語であるが、噴水までもが、卒業生を元氣に見送っているようにも思える。

鐘の音の届く限りを花あんず 榎本 秀治

春おそい信州に桜より一足先にひらく、日本一のおんずの里がある。善光寺平を望む展望台に登れば一目十万本といわれている日本一のおんずの里が見渡せて、杏の花色に染まりそうだと。昔から善光寺の鐘の音が聞こえるところにあんずが育つと言われた。

御仏と春のひかりと坐禅組む 秋山ユキ子

和敬清寂の精神を心持とする禅寺での修行。禅寺の仕様は日本の伝統的な造りで、多くの光が入らないように無双窓がつけられており、差し込んでくる一条の春の光は静謐である。坐禅の心を助けてくれ御仏に見守られながら神々しい空間を作り出している。

蒼海のはるかな記憶犬ふぐり 溝呂木信子

蒼海とは青々した広い海のことをいうが、「蒼海桑田」という言葉もある。広い海原が桑畑に変わる。世の中の移り変わりの激しいことのたとえであるが、今犬ふぐりが生える草原もかつては大海原であったかも知れない。

そこだけが明るき夕べヒヤシンス 下村たつ糸

ヒヤシンスは水栽培でも育てられるので、室内で春を一杯楽しませてくれる花。その明るい色でどんな部屋も元氣にくくれる。香りも素晴らしく、夕方になってもヒヤシンスの周りだけはいつまでも明るい。(以下略)

沖作品



能村研三選

いつよりと言へぬ一景蜷の道

鶯やしづしづ開ける厨窓

* 木製のパン屋の引戸ミモザ咲く

苔水車ざんざん注ぎの春の水

建売の受付机春の塵

調律の響ける窓の春夕焼

春寒やオリオンの空手に触れむ

梅東風や子の踏んでゆく土竜塚

テトラポッド乾きやすしや鳥帰る

* 噴水の 一柱 光り 卒業す

葺替や「結」の仲間息合ひて

* 鐘の音の届く限りを花あんず

春大根まとはる土のやはらかき

縄文の民の子孫ぞ蜆取

遊山箱向かうは円き木の芽山

千葉

木村 美翠

岡本 秀子

茨城

榎本 秀治

* 御仏と春のひかりと坐禅組む

動くもの動かざるもの皆桜

露の葉の切つ先の香や迸る

練切の盆の一枝山紫陽花

綱渡る 大道芸の手に扇

魚は氷に前座の所作のきびきびと

* 蒼海のはるかな記憶犬ふぐり

千二百年継ぐ式年の花の春

植樹なる若松小松のびよ伸びよ

清明や空海の書の伸びやかに

* そこだけが明るき夕べヒヤシンス

漢方は木の根草の根つちふれり

霾や地球にもある偏頭痛

採血あと少し滲みて鳥雲に

紙風船夢ほどけてはまた紡ぐ

神奈川

秋山ユキ子

市川市

溝呂木信子

千葉

下村たつゑ